

---

# 記憶喪失の求職者

ただ書く人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

記憶喪失の求職者

### 【Zコード】

Z5162Y

### 【作者名】

ただ書く人

### 【あらすじ】

三浦みさきには記憶がなく、その名前も仮のものだつた。

彼女は自立した生活を送るために仕事を探していたが、身の上のわからない彼女にはなかなか仕事が見つかることはない。

しかしある日、毎週彼女の話を聞いていた医者に、彼女は突如記憶を思い出したと伝える。

その記憶とは……。

「たんたんとショートショート」というサイトに掲載済みの作品

で  
す

「先生、わたし思い出しました。警察官だったような気がします」「みさきは固いソファに座ると、すぐに話を始めた。

「ほひ、警察官。どうしてそう思いましたか」みさきに答えるながら医者もゆっくりとした動きで、彼女の向かいに腰をかけた。

「ええ、初めてこの病院に来た時から家を見つけて現在の生活になるまで、今でもずっとお世話になつていてる方がいまして、その方が他人ではないように思うのです。先生もご存知だと思いますが、女性警察官のHさんです。でも、Hさんが家族や友人、わたしの知り合いでしたら、すぐに気づかれるはずでしょ。気づかないということは、Hさんはわたしを知らないことになります。それなのに他人とは思えない。ということは、同じ仕事をしてた可能性が高いと思うのですが、いかがでしょ？」

「すると、思い出したと言つても、やつと思つたといつことでしょうか？」

「ええ、でも間違いないと思います」

「なるほど……。ああ、コーヒーでも飲みますか」

医者とみさきが座つている応接セットの奥にある事務机の前で椅子に座つてふたりを見ていた女性看護師は、医者の言葉を聞くとすぐ立ち上がりつて部屋の隅にあるコーヒーメーカーに向かつた。

医者は首をひねつて彼女の後ろ姿に軽く礼を言つと、またみさきを正面から見据えた。

「行方不明の警察官がいたらすぐに捜索されて情報が入つてくると思いますが……。どうして間違いないと思うのですか」

「ええ、わたしはかなり体力があるよつのんです。警察官でなければ自衛官かもしません」

「うん、どうだろうね。とりあえず警察にはわたしから問い合わせてみましょ。他に思い出したことなどはありませんか」

「いいえ、特には……」

「では、最近のお話を聞きましょうか」

三浦みさきはいわゆる記憶喪失で、三浦市にあるこの病院に入院していた。現在は退院して週に一回ほどの頻度で通院をしている。発見時の彼女は突如交番に現れ、記憶がないのだがどうしたらいいだろうかと勤務中の警察官に尋ねたのだった。

彼女は財布も身元のわかるものも身につけておらず、グレーのパークーにベージュの七分丈のズボン、とても外出用とは思えないサンダルを履いていた。

交番勤務の警察官は最初何かの冗談かとあしらっていた。記憶を失ったというのならば、何らかの事件や事故に遭ったと考えられるが、彼女には怪我もなく衣服も乱れていなかつた。あまりに突飛な話であるし、警察官の対応もしかたのないことだろ。

しかし、警察官が何を言つても帰ることがなく、彼女は繰り返し記憶がないことを訴え続け、やはり何かおかしい、手に負えないと考えた警察官が応援を呼び、その後病院に連れてこられたのだった。年齢は十代後半から二十代半ばに見えた。化粧はしておらず、ラフな服装からも近所の人間ではないかと思われたが、該当する行方不明者の情報はなく、彼女の入院中も続けられていた周辺での聞き込み調査でも身元は判明しなかつた。全国に調査の幅を広げてもそれは同じことで、現在に至るまで何ひとつ彼女の身元に関する情報は出てきていない。

言葉は失つておらず、その他の生活に関する知識は何も失つていなかつた。病院の駐車場で試したが、自動車の運転もできるようだつた。もちろん交通ルールも知つていた。言葉遣いや普段の振る舞いからも、成人した女性、恐らくはどこかで就労していた女性である可能性が高い。しかし、これまでのところ何かに対しても突出した知識や能力は見つかっておらず、自分では体力があると言うが若い女性の中では平均程度だ。専門的な知識や技術が必要のない仕事をし

ていたのではないか。医者はこう考えていた。

しかし、その仕事を含め、学歴、家族、交友関係、名前、年齢、そ  
ういった事柄についての記憶は、すべてを失っていた。

もちろん、三浦みさきとこう名前も仮のものだ。三浦市で発見され  
た女性ということで、入院中に看護師たちが「三浦の女性」と言つ  
ていたものがいつの間にか「三浦さん」になり、それが本人の耳に  
も入つて自分の名前を「三浦みさき」とした。「みさき」は“それ  
っぽいから”と彼女自身が決めたものだつた。

一応年齢は二十二歳としてある。これもみさきが自分で決めたもの  
で、彼女が言つには「大人として見られる一番若い年齢」だつた。  
二十一歳の三浦みさきは、公的機関や彼女のような身の上の人間を  
支援するNPO団体からの支援もあって、現在は市内のアパートに  
ひとりで暮らしている。世の中にはいろいろな団体があるものだと  
医者は関心していた。仕事を探してはいるが、職歴も学歴も、身の  
上すらもわからない若い女を雇ってくれる会社などなかなか見つか  
らない。同情はしてくれるのだが採用されることではなく、現在のみ  
さきの悩みはここにあった。

もう少しいろいろと不安になるものではないかと医者は思つていた  
が、家族や友人の記憶がなければ気にもならないのかもしれない。  
みさきはあまり過去を気にしてはおらず、人の世話にならないで早  
く自立した生活ができるようにならなければ、現在の状況に焦燥  
していた。

「先生、わたしはスポーツ選手だったかもしません」

みさきが来院するたびにこのよつた話をするのも、何かを見つけな  
ければならない、自分がいるべき場所を作つて自分の生活をしなけ  
ればならない、そういうた氣持が強いためだろう。彼女の自我も肉  
体も確かに存在しているが、社会的にはいるのかいないのかわから  
ない存在で、その不安定な自分をどこかに押し込めたい欲求があ  
るものと思われた。

医者にとつては専門外のことではあるが、筋肉の付き方などからも彼女はスポーツ選手でなかつただろうと容易に判別できた。しかし彼女の話は否定せずに、現在の状況や思考を十分に聞き出す。みさきの発見時の状況から、記憶喪失の原因は外的な衝撃によるものではなく、精神面に強い衝撃があつたからなのではないかと思われた。治療については医者もお手上げの状態で、何かの偶然で記憶を取り戻すこと以外ないかも知れないと半ば諦めていたが、せめて彼女の精神面の助けになれるようにと医者は考えていた。もちろん、このような特異なケースに興味も強かつた。

みさきがこれまでに“思い出した”職種は、警察官とスポーツ選手の他に、医師、看護師、理容師、調理師、バスドライバー、写真家、画家などがあつたが、いずれも身近で見かけたものを自分に結びつけただけのもので、それらに関わる知識や技術は持つていなかつた。すべて自分が当てはまるのではないかというみさきの思いつきで、その思いつきから希望や期待を含めて本来の自分を想像し、そこに居場所を求めようとしているのだろう。みさき自身これらの職種にこだわりがあるわけではなく、様々な職種に応募していた。

みさきは愛嬌のある容姿をしているし、礼儀正しく一般的な成人程度の教養もある。身の上がわからないことは問題かもしれないが、それでも商店のアルバイトや小さな会社の事務員などとして、すぐに仕事が見つかるだろうと医者は考えていた。しかし、医者の思つたように仕事が見つからず、みさきは強く焦りを感じていた。

「先生、どうやらわたしは忍者だつたようです」

「ほう、忍者ですか。どうしてそう思ったのでしょうか？」

みさきの言葉に医者は少し驚いた。これまで現実にある職種しか出てこなかつたが、今日は忍者だと貰う。忍者が現実にいないとは言い切れないが、現代のこの国に忍者というものがいるのだろうか。医者は、忍術道場などは聞いたことがあつたし、有名な忍者の何代目だと称する人物をテレビで見たこともある。しかし、歴史やフィ

クションの中に見られるあの忍者が現代に「こな」とは思つてこなかつた。

「思ひ出したのです」

「何かきつかけがあつて思ひだしたのですか」

「いいえ、百田経つたら思ひ出すよひにしてこました。三田前でちよつび百田になりましたので」

「思ひ出すよひしていたところとが、自分の力でやうしたといふことですか」

「はい、詳しい方法は説明できませんが、そのための術と薬があります」

「その、忍者だったところと以外にも思ひ出されたことはありますか」

「すべて思ひ出しました」

「お名前や」家族もですか」

「家族はいません。名前はわかりますが教える」とせでませんでしたし、今は不要です」

「住んでいたところはばどひでしょひ」

「わかりますが、それも教える」とせでません」

確かにみさきは少し突飛な話をすることがあつた。しかし今回は違つていて、以前も住まいもわかるとせつかり言つたことなどなかつた。

とは言つものの、彼らを教えてくれる「ことはない」ので、医者は少し感心しながらも、テレビか何かの影響によゐる思ひつけだらうと考えた。

「なるほど……。少しコーヒーでも飲みましょひ」

医者の言葉に、奥に座つていた看護師はこつものよひにコーヒーの準備に向かつて、医者はその後ろ姿に軽く礼を述べた。

「すみません、先生。おかしな話をしていると思われるでしょう。でも、これは本当のことです」

「わかりました。では、どうして名前や住まいを教えていただくな

とができないのでしょうか？

「忍者なので、としか言いようがないません。今は忍者ではありませんが……」

「ふむ、しかし住まいがわかつているのなら、戻つて再び忍者として生活ができますね」

「いいえ、それができないのです」

「なぜですか？」

「わたしは忍者を辞めたのです。他の道で生きる」としたのです」「でも家には戻つてもいいのでは」

「いいえ、そこにはもう何もないはずです」

「どうしたことでしょうか？」

医者が尋ねると、みさきは少し間を置いて、何かを考えるようにして窓の外を見た。そしてテーブルに置かれたコーヒーをひと口飲むと、「守秘義務というものがありますよね。あまり他の人に話さないでいただきたいのですが……」と話を始めた。

みさきが言うには、忍者を辞めるためには一度記憶を消さなければならぬらしい。それが百日間というのが決まりだった。その間に他の忍者たちは、それまでの拠点を捨ててどこか別の場所に移動してしまうという。みさきは忍者としての自分、過去を捨てて、新しい自分として生きていくことを決め、自ら記憶を操作したらしい。「なので、わたしは今まで通り仕事を探さなければならないし、今まで通り三浦みさきでなければならないのです」

「記憶はあってもなくても変わらないということですか？」

「はい、むしろ思い出さないままの方がよかつたのですが、あまり長く記憶を失くしたままにしてしまつと、脳に影響が出てしまつてしまいので」

医者もつい興味を持つてしまつて、忍者についていろいろと尋ねたが、みさきからは何も聞き出すことができなかつた。

その後はいつものように近況を聞き、みさきは礼を言つて帰つていつた。

その日以降、みさきは少し変わった。

警察官だったかもしない、看護師だったかもしない、といった話をしなくなり、医者の気のせいかもしないが口数が減つたようだつた。

みさきは本当に忍者だったのかもしれない。当初は信じていなかつたが、どうしてか時間が経つほどに医者はその話を信じるようになつていつた。

しかし、みさき自身が過去を必要としていることもあります。医者は以前までと同様にみさきに接していた。

それから少し経つて、みさきは小さな「デザイン会社の事務員としての採用が決まり、医者はそれを機にもつ通院の必要も無しとした。

「やはり忍者だったことは思い出してもよかつたかもしません。人前で自分を演じられるとでも言いますか……」最後の診療日にみさきは医者にこう言つた。「中に自分がひとりいるからこそ、新しい自分を作れるのですね。これがわかれれば人が変わるのは意外と簡単かもしれません」

「なるほど。確かにその通りかもしませんね」

医者が答えた後に少し間を置くと、奥に座っていた看護師は医者の言葉を聞く前にコーヒーを準備するために立ち上がつた。

「コーヒーは飲みますよね。慣れてくるとすごいですね」と医者はコーヒーを準備している看護師を見やつた。

「わたしにも先生がコーヒーでもとおっしゃるだらうことがわかりましたよ」とみさきは笑つて言葉を続けた。「わたしも職場でそうやって慣れることができるでしょうか」

「環境によつて慣れるまでの長さは違つでしょうが、慣れる」とは難しくないと見ていますよ。もし慣れることができなかつたら、また別の仕事を探してもいいでしょ？」

「やつと見つけた仕事ですし、そんな簡単には別の仕事も見つかりませんよ」

「もしもです。その時にはまた相談に来てください」「なるべくそうならないように頑張ります」

みさきはその後、病院に来ることも医者に連絡をしてくることもなく、医者も時折彼女を思い出すことがある程度だった。

数年経つても、医者は変わらない場所で変わらない診療を続けており、応接セットのソファーに患者を座らせていた。

いつものように患者との話の途中で医者が少し間を置くと、奥の事務机の前で控えていた看護師が立ち上がりてコーヒーの準備に向かう。

今週ここに来たばかりの看護師だ。ずいぶん気が利いてるなど医者は関心して、なんとなく見覚えのある後ろ姿に礼を言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5162y/>

---

記憶喪失の求職者

2011年11月17日21時16分発行